

Letters

Arpak

レターズアルパック

VOL.236

ISSN 2432-5295

器

CONTENTS

◆【器】…01～04

・器を壊してみると…? ・器量 西山卯三とアルパック ・4×4アルミダイキャスト ・器から都市のあり方を考えてみた ・器のまちで新しい味に出会う ・料理×器 ・土と炎の神秘にふれる

◆今、こんな仕事をしています…05～08

◆近況&イベントのお知らせ…09～10

◆まちかど…裏表紙

・大阪のDEEPな魅力を発見!

器

深山に分け入ってとち、ぶな、けやきなどから椀や盆などの木地をつくる人を木地師といいます（※）。木地師がつくった木地は漆器として仕上げられますが、漆器は日本の伝統的な工芸でもあります。木地師は轆轤をつかって木地をつくるので、丸い形のが基本です。陶器もそうです。

日本には古田織部の茶器のような破格の美という価値観もありますが、「器」という字が左右対称であるように、多くは均整のとれた美が尊ばれてきました。「器」で画像検索してみると、角形のものや楕円形のものももちろんありますが、陶器も漆器も圧倒的に円形のものが多いです。

器にはいれものという意味以外にも、道具や才能などの意味もあります。これらは人が使うものや人に備わるもので、いずれも人との関係が強いものです。ダビンチは人体の比率から黄金比を見出しました。人には本来「均整」が宿っているのでしょうか。

今回のテーマは「器」としました。執筆者の「均整」をお楽しみください。

レターズアルパック編集委員会

※アルパックは東近江市の木地師文化の発信に関わっています（レターズアルパックVOL.234参照）。

器を壊してみると・・・？

新開夏織：
建築プランニング・デザイングループ



私たちのグループの作品

「器」というテーマでふと思いついたのが、建築学科に入学してから1年の終わりに差し掛かったころに参加した、上回生の先輩が企画してくださった「UTSUWAな空間」というワークショップです。

タイトルからは既製の器を組み合わせて何らかの空間を想像するような内容をイメージしていたのですが、なんと、陶磁器でできたお皿やどんぶりをトンカチでたたき割り、その破片を組み合わせて何らかの空間を創造しようというものでした。

最初から度肝を抜かれる説明を受け、これからどうなるんだ

と不安とわくわくが交互に入り混じりながらも、まずは恐る恐る器たちを割っていきましました。ちなみに、トンカチでわざわざ器を割るのはこれが初めての経験でした。

器たちは一瞬のうちに原形をなくし、元々の役割から解放されたように、小ささまざまな形の欠片となって散らばっていました。

今度はそれらを拾い集め、グループのメンバーと一緒に「空間」なるものを探します。破片と化した真つ平なお皿や一部だけ欠けたどんぶりなどを眺めたり組み合わせたりしながらどんなものができそうかを想像します。『もう少し大きければ空間っぽいものができそうなのに：』『この破片は何に使えるんだろ：』と苦戦しながらも、必死に手を動かして形にし、添景や背景と合わせて写真に収めました。

最後に各グループで作品を発表し、ゲストの先生から講評をいただきました。他のグループでは、遠近法を上手に使ったかっこいい作品や、フォトショップで合成した綺麗な作品もありましたが、私たちのグループが作ったのは、破片を組

み合わせた公園のようなオブジェのような、何とも言えない不思議な作品でした。

正直なところ、作品自体はあまりうまくいったと思っていません。しかし、最初の「器を壊す」という行為がとても新鮮で、それまで大学で習っていたスチレンボードを使ったスタディ以外にもこんな方法があるんだという気付きにつながり、私の既成概念まで覆すような強いインパクトのある体験となりました。

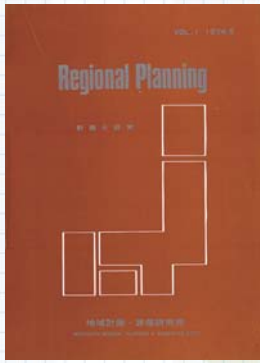
今でも仕事などで悩みすぎていると、気づかぬうちにどんどん型にはまって抜け出せなくなるような感覚に陥ることがあります。そんなときは器のワークショップを思い出して、たまにはいつもと違うことをして発想の転換を図ってみようと思いました。



他のグループの作品

器量 西山外三とアルパック

三輪泰司：
名誉会長



Regional Planning No.1

器・ウツワと言えば、「器量」。アルパックにあつては、創立者・西山外三の「器量」。

「すまい・まちづくり文庫」が「西山外三とその時代」（修正版）を刊行したのは、2000年10月1日。296ページのうち、アルパックに関わる事項は、延べ1ページもない。私どもは、まるで「お釈迦さまの手のひらで踊る孫悟空」でした。

「Regional Planning 第1号」社員必読のいわば「経典」。「1967年2月3日の3人」は、いわば最初の「使徒」。

企業経営体であれ、研究機関であれ、はたまた、国家であれ、社会集団の存在は、指導者の器量に拠ること、古今東西で定まるところ。ところが、大学等の



研究職は「定年」がある。企業経営体のほうが「持続」する。大学退職後、「社員」になって頂いた。西山外三は生涯、アルパック社員でした。健康保険を保持していた。

アルパック・ビジョンを拓く使徒たらんとする者どもは、すべからず、関西学研都市の一角、積水ハウス総合住宅研究所内の「西山外三記念すまい・まちづくり文庫」を訪ねるべし。「器量」を学ぶべきではなかるうか。

膨大な資料・文献は、アルパック京都本社分室で預って継承し、研究職の使徒どもが奉仕し、「アーカイブ」にしてきたのです。



西山外三とその時代



1967年2月3日の三人（外三描）

4×4・アルミダイキャスト

廣部出：
公共マネジメントグループ

この一年、恐らくですが、アルパックで最も多くアナゴのヤツをバラしてます。首根っこにナイフを入れてスパッと、です。ずいぶんと手際が良くなったもんです。いちばん最近のヤツは、ヤツたあとに吊るして生干しにしてやりました。面倒をかけやがります、私が。あとでソイツを冷凍しておいて、イザという時にちよいと阿列布油を垂らして火に掛けて炙ってやりやあいわけです。ちよつと恰幅の良かったガシラのヤツも、似たような目に合わせてやりました。添付の画像がその証拠です。

他にもいろんなヤツをやってきましたが、タコのヤツもまーまーやってやりましたよ。先ずもって身体の骨がなくなるくらいにタコ殴りですわ。むろん、ナマで、茹でで、煮炊きでと、ありとあらゆる目に合わせてやります。たまりません。

後の始末が面倒だと導入が許可されてこなかったブーツも秘密裏に入手しました。標題の、フォーバイフォーの16穴、アルミダイキャストモデルです。軽く、コンパクトで大変ハンドリングがよろしい。まずは、切り



似たような目に合わされた、恰幅のいいガシラ氏

取った内臓や足先などから片付けていきます。後の始末も抜かりはないのです。近隣への影響を考慮し、真ん中の4穴だけで調味油を熱して、そこに漬けてやります。アヒージョ旨いです。底に溜まったタコウマエキスは、儘よとパンにでも吸わせてやります。すげー旨いです。そして、満を持して生タコのたこ焼きです。ソースもマヨも、余計なものは何にも要りません。なんならいっそ小麦粉も要らないくらいです。いわゆる、控えめにいってサイコー、です。

鮮度抜群の生タコと、アルミの熱伝導とテフロン加工のおかげで、どうやら家人も歴史に裏打ちされたたこ焼き器への偏見を捨てたようです。

器から都市のあり方を 考えてみた

石川聡史：
都市・地域プランニンググループ

私は食えることは好きですが、食器にはあまりこだわりがありません。強いて言うならあまりたくさん物を増やしたくないので、個人的で料理を選んでしまうような器よりも、どんな料理にも使える控えめなデザインで丈夫な器が好みです。

しかし、食器に見た目や触感で料理をおいしくする大切な役目があることは理解できますし、いろいろ揃えると食卓がにぎやかで楽しくなるだろうなとも思います。

ところで、私たちの仕事のフィールドである都市や地域は器に例えられることがあります。その場合、料理は人々や地域の資源、経済活動などでしょうか。

その器である都市は、人口減少が進む中、生き残りをかけて少しでも価値を高めようと、その土地の歴史や自然などをよりどころにして個性を磨こうとします。一方で、価値観やライフスタイルの多様化が進んでおり、都市が個性的になるとそれに合う人は良いのですが、そうでない人は離れていってしまうでしょう。個性を磨いたのは良いものの、価値が上がりすぎて

若い世代が住めなくなり人口が流出してしまっている都市もあります。

こだわりを持つポイントは人それぞれであり、私が器にこだわらないように自分が住むところにあまり興味がない人もいます。

都市が生き残るには、どんな料理も受け入れられるシンプルな器のように、あまり個性を主張せず、それでいてどんなライフスタイルも受け入れられるような、全方位型を目指すのも一つの方向性かもしれません。

以上、器というテーマから、ちよつと真面目に都市のあり方を考えてみました。



器のまちで新しい味に 出会う

太田雅己：
生活デザイングループ



城内坂のまちなみ

木々の葉が赤く色づいてきた頃、栃木県の益子町に行きました。城内坂通りという益子のメインストリートがあり、沿道に陶器の販売店や飲食店、ギャラリイなどが並んでいます。窯元は一軒一軒、個性豊かで、見て回るだけで面白いものでした。

特段、陶器に造詣が深い訳ではないので、基本的には見るだけで楽しんでしまい、あまり買って帰ることがなかったのですが、今回は違いました。ある窯元で出会った器の謳い文句に目が留まりました。

「ビールがびっくりするほどおいしくなります」

愚かにもジョッキがグラスでしかビールを飲んだことのない私は、理解ができませんでした。目を引かれていると、店番の奥様が解説してくれました。

益子焼の特徴として、陶土に気泡を多く含むそうです。その気泡による細かな凹凸によって、ビールの泡がなめらかなになる、ということだそうです。

帰ってからは実践。なんと、缶で飲むのとは全然違う、クリーミーな味わいになりました。器によってこんなに口当たりが変わるとは驚きでした。

作品として見るだけでなく、それを使って食事するところまで楽しめる。見るだけだった自分から少し大人になった気分です。陶土の特徴が活かされるというのも面白いです。まだ見ぬ器を求めて、他の産地へも行ってみたいと思います。



料理×器

植松陽子：

サスティナビリティマネジメントグループ

瀬戸焼は「釉薬」を用いて陶器を完成された日本最古の焼き物で、唯一、中世から釉薬を施したやきものが発展した産地で、耐水性や耐久性に優れ、日常使いに重宝されてきました。灰釉、鉄釉、古瀬戸、黄瀬戸、

愛知には、常滑焼、瀬戸焼という日本六古窯のうちの2つがあり、今も多くの人に愛されています。常滑焼は鉄分が多い赤茶色の急須が人気ですが、かつては土管やレンガ、タイルづくりも盛んで、東京駅丸の内駅舎復元にも常滑産レンガが使われたそう。常滑焼に囲まれてくることができる「やきもの散歩道」は、映えスポットとしても人気です。



御深井といももち



織部とみそおでん

志野、織部、御深井と、色とりどり個性豊かな器たちが顔を並べます。彼ら・彼女らは伝統的な器でありながらも、いまどきの食卓にも溶け込み、シンプルな料理でも、彩りよく、時には滋味深さをまとわせてくれ、いかにも美味しそうに演出してくれます。自宅の食器棚にもいくつかの器が並び、自分が一番美味しく演出できるんだぞと、自らを主張してきます。キッチンで中身(料理)をこしらえたあとが、楽しくもコーディネート力が問われるマツチングの時間です。よく活躍してくれるのは、無骨ながらもなじみのよい織部と、柔らかく透明感のある御深井。人やビジネスに置き換えてみるとどうでしょうか。どの焼き物がマツチングしやすいのだろうと、ふと思いにふけり。

執筆しているうちに、寒くなってきたし、なんだか温かみのある黄瀬戸もいいよね、となってきました。モノを増やしたくないのと、食器棚のスペースもないのとで、ここところずつとぐつと我慢して、購入を控えていましたが、さて出かけるよかな。中身を価値以上にしてくれる器は、私の毎日を豊かにしてくれていることは間違いないようです。

土と炎の神秘にふれる

中村孝子：
企画政策推進室



窯の横には愛宕さんの「火煙要領」のお札があります



愛用している器と温度確認用の土器

かつて京都市内には、清水焼・京焼の登り窯がありました。現在、操業している登り窯は一つも残っていませんが、宇治の山奥にあります。数年前まで、秋が深まると陶芸家の友達が窯焼きのお手伝いをするので毎年見に行くのが恒例となっていました(友達は元同僚の旦那さんです)。深夜に動物が飛び出しそうなハラハラする山道に車で向かいます。下界との気温差は激しく息も白くなります。よくぞこんな山奥に作られたと立派なその姿を見るたびに感動させられます。

火入れは、3日〜4日間2交代制で友達の担当は夜からなので、眠い目をこすりながらの参加です。各地から運ばれてきたびっしり積まれた松割木は目を追うごとに減っていきます(松

ちなみに毎日使っている器は、友達のお作品です。今日もおまけ…窯出しの器が冷めていくときの澄んだ「キン」という貫入音は、器がおしゃべりしているようです。

の中で暴れまくる炎は、まるで龍のようで、熱すぎて短時間しか見ていられません。一応温度計はありますが、高温になると測れないので、中にある確認用の土器で焼き具合をみながらの真剣勝負です(私はみているだけですが)。窯に木をくべ続けるピーンと張りつめた空間は、神々しくここには火の神さんが宿ると感じざるをえません。陶芸家も同じだと思えますが、土と炎の神秘に魅了されます。コロナ禍でしばらく訪れていないので、そろそろ火入れを見に行こうと思っています。

は火力が強いそうです。緩い斜面にある登り窯の内部は何部屋かに仕切られ、中をぞくと順序良く器がたくさん並んでいて圧巻です。残念ながら器をいれる窯詰は見たことがありません。窯は正面からみると、芋虫の顔のようでなんだか親近感がわいてきます。とてもかわゆいです。そして窯

アルパックとゆかりの深い万博公園の活性化に向けたビジョンの見直し

坂井信行：

ソーシャル・イノベティブデザイングループ

日本万国博覧会、いわゆる大阪万博が開催されたのは1970年、草創期のアルパックは会場計画や施設設計に関わっていました。

先輩方からの話によると、会場計画の第二次案までを担った西山卯三グループに参画、その後は警備消防本部ビル設計を手掛けています。大阪万博会場の跡地は現在、日本万国博覧会記念公園（以下「万博公園」となっています。今回、私たちは、万博公園の活性化に向けた将来ビジョンの見直しとアクションプランの策定にかかる業務に関わらせていただいています。

ビジョン案については、先ごろパブリックコメントの手続きが終わり、まもなく策定の運びとなっております。内容を少しご紹介すると、基本テーマは「人類の進歩と調和」、基本理念は「緑に包まれた文化公園」で、これらは旧ビジョンを継承しています。新ビジョン案では、①レガシーの再生・継承、②多様性への対応、③持続可能な未来社会への貢献、④文化・スポーツを拠点とする新しいライフスタイル、の4つの視点を盛り込んで目標や基本方針などが更新されました。

公園事務所には大阪万博に関わる膨大な資料が保管されており、レガシーの再生・継



丹下健三、岡本太郎、イサムノグチのレガシー3種盛

承の視点からそれらのアーカイブ化や活用が重要な課題のテーマになっています。資料のアーカイブ化に関しては、中之島美術館のアーキビストである中山ひとみさんにもいろいろ教えていただきました。ちなみにアーカイブズの専門家であるアーキビストの存在は初めて知りました。国立公文書館による認証アーキビストという制度もあるそうです。

さて、公園事務所の資料室を見せていただいた時、偶然にも警備消防本部の設計図書を発見しました。竣工図のコピーのようでしたが、実際に目にしたのは初めてで感慨深いものがありました。アルパックとゆかりの深い万博公園の業務ということで、鋭意取組を進めています。

まちにエキソアレがやってきた！ ～神戸市における貨客混載の取組～

嶋崎雅嘉：

生活デザイングループ

人口減少、少子・高齢化の進行などにより、公共交通を取り巻く環境は年々厳しい状況にあり、郊外を走る路線バスにおいても、輸送需要の減少が深刻な課題となっています。

また、高度経済成長期に郊外に開発されたニュータウンにおいては、人口減少、少子・高齢化の進行などにより、身近な生活利便施設の衰退、地縁的なつながりの希薄化による地域コミュニティの衰退等が懸念されています。

このような状況の中、神戸市では神姫ゾーンバス等と連携して、西神中央駅のショッピングセンターと郊外の住宅地、農産物直売所を結びつけ、人（客）とモノ（貨）を併せて運搬することで新たな収入源を得ることでバス路線を維持する実証事業をスタートしました。10月から始まった郊外住宅地



出張エキソアレに多くの住民の方々が訪れてくれました

での移動販売は「出張エキソアレ」と名付けられ、エキソアレ西神中央で販売している商品も毎週水曜日に運び込み、バスの車内で販売しています。移動販売は毎回好評を博しており、お弁当や豚まん、パンなどの食品を中心として普段とは違う雰囲気でも多くの住民の皆様にお買い物を楽しんでいただいています。

今後、どのように路線バスの維持により一層貢献する取組としていけるのかなど、実施内容の検証を図りながら、参加事業者間の連携による取組を強めていきたいと考えています。

なお、本実証事業は、国土交通省より「共創による地域交通形成支援事業（交通を地域のくらしと一体として捉え、様々な分野（エネルギー、医療、教育など）」との垣根を越えて行う共創モデル実証プロジェクト」に選定され実施しています。



買い物を楽しめるバス内

事業者・行政・学生の連携で 食品ロス削減を推進しています

長沢弘樹：

サステナビリティマネジメントグループ

例えば、当社の大阪市で実施した調査では、家庭から出てくるごみの約1割、事業所から出てくるごみの2割がいわゆる食品ロスです。

この食品ロスを削減するため、大阪府では自ら食品ロス削減に積極的に取り組み、消費者に効果的な啓発を実施する事業者を「食品ロス削減パートナーシップ事業者」と認定し、連携して食品ロス削減に取り組んでいます。

今回、この食品ロス削減パートナーシップ事業者の1つであるエイチ・ツー・オーリテイリング株式会社、大阪府、さらに「もったいないやん！食の都大阪でおいしく食べきろう」学生プロジェクト参加大学等と連携し、デイリーカーナートイズミヤ花園町店で食品ロス削減の実証事業を支援していますのでご紹介いたします。

まずは学生らが店舗を見て回り、「見切品コーナーが見やすくなれば魅力が増す」「なじみのない食材は敬遠しがち」等の意見を頂きました。さらに従業員の意見も踏まえ、POPなどの食品ロス削減の訴求ツールの掲示による情報提供の強化と見やすい・買いやすい割引品コーナーの設置の2点を中心として取り組むことに決めました。また、

POPの内容についても学生らのアイデアを反映するなど、よりわかりやすく、伝わりやすくするよう工夫しています。

当社では、これまで食品ロス削減に向けて、組成調査やアンケート等による実態把握から自治体の計画策定、モデル実証などさまざまな取組を支援してきました。

簡単そうに見えて、いざ実行となると進まないのが食品ロス削減ですが、少しでもよりよい未来に向けて、できることをさらに広げていきたいと思っています。

※パートナーシップ事業者：
<https://www.pref.osaka.lg.jp/ryutai/foodloss/partnership.html>

※「もったいないやん！食の都大阪でおいしく食べきろう」学生プロジェクト：<https://www.pref.osaka.lg.jp/ryutai/foodloss/notainaiproject.html>
※本事業では、他に立命館大学の学生団体「BoNo」にも協力をいただいています。



丸亀市の産業振興に向けて

山口泰生：

地域産業イノベーショングループ

丸亀市では「第三次丸亀市産業振興計画」の策定に向けて取り組んでいます。

香川県丸亀市は、歴史、文化、芸術、伝統と近代的産業が共存する地域です。16世紀末から丸亀城を中心とする城下町として繁栄し、丸亀うちわに代表される伝統産業と沿岸部に形成された塩田を活用した製造業を中心に発展してきました。

このような歴史を持つ丸亀市の産業振興を図るために、2011年（平成23年）3月に「丸亀市産業振興条例」が制定されました。また、本条例のもと、事業者、市民、産業経済団体等と行政が一体となって産業振興の取り組みを図る「丸亀市産業振興計画（平成25年度～平成29年度）」及び「第二次丸亀市産業振興計画（平成30年度～令和4年度）」を策定してきました。

第二次計画においては、今年度が5ヶ年計画の最終年となるため、この度、アルパックでは「第三次丸亀市産業振興計画（令和5年度～令和9年度）」の策定に向けて、産業振興会議やワークショップの開催、事業者へのヒアリング・アンケート調査などを支援しています。

近年は、国際情勢の緊迫化や新型コロナウイルス感染症の世界的な流行、またSDGsやカーボンニュートラルに対する意識の高まりによって、丸亀市を取



写真出典：丸亀市

(<https://www.marugame-castle.jp/about/history/>)

り巻く産業も大きな転換点を迎えており、今の時代状況に合った産業振興計画が求められています。

ヒアリング調査の中では、産業人材の不足、伝統・観光産業や第一次産業の衰退など、多くの課題が把握できた一方で、丸亀市には、丸亀城や中津万象園、本島、ポートルース場など、魅力的な資源が多くあり、また今後の丸亀市の産業振興に係ることについても、非常に前向きなご意見を持っている事業者が多いと感じました。

現在、第三次計画の策定においては、最終調整に間もなく入るところまで来ています。この計画を通して、丸亀市の産業振興が図られるだけでなく、丸亀市に住む方々が、地域への誇りを持ってもらえることを期待しています。

そのまちらしい「滞留」の模索



(仮設) ホテル前のくつろぎ空間



(仮設) ハイブランド前のアートや植栽



(仮設) アメリカ村のPOPUP店舗



整備完了区間でのスポンサー花壇の検証

地元の皆さんとともに、南エリアと道のあり方の未来像を描く作業が必要なのだと改めて感じています。
※写真はミナミ御堂筋の会が携わった空間創出の様子です。

整備完了区間での検証
ば、「いや、横道入って茶店で読めば？」という方もいるでしょう。成熟したまちにおける道に求められる(必要な)役割はまだ議論が必要です。また、現場レベルでは滞留の代償として放置駐車やごみの放置の問題も出ています。

今回は、整備が完了した区間での設え等の最終形の検証に加えて、新たに市が整備を考えている区間で仮設的に歩行者空間を拡張するのにぎわい・滞留空間の創出に取り組みました。私

大阪市では、御堂筋の淀屋橋〜難波駅前を「歩行者利便増進道路」に指定しており、既存の側道を閉鎖し、歩行者空間化する取組を進めています。御堂筋チャレンジとは、歩行者空間化した後の利活用のあり方を考えるための取組で、今回で4回目を迎えました。

竹内和巳：
生活デザイングループ

アルパックが事務局を務める、ミナミ御堂筋の会が大阪市等と協力して取り組む社会実験「御堂筋チャレンジ2022」が実施されました。



整備完了区間での本設ベンチの検証

は今年度から取組に参加しており、なおかつ交通等に詳しくないので、物を語るには十分ではないのですが、感じているのは、地方と大都会でメインストリート(道)に求められる役割が全然違うのだろう、ということだと思います。例えば、心斎橋のイチョウの下のベンチで本を読む姿を想像してみてください。「新しい風景だ!」という方もいるでしょう。横道入って茶店で読めば? という方もいるでしょう。成熟したまちにおける道に求められる(必要な)役割はまだ議論が必要です。また、現場レベルでは滞留の代償として放置駐車やごみの放置の問題も出ています。

魅力的なメインストリートづくりの取組 “茨木みちクル”の社会実験を実施しました!

太田雅己：
生活デザイングループ



東駅前公園での実施の様子 (通りに面する公園の入口部分での休憩空間の創出)

空間のあり方を検証するため、11月3日〜30日まで1ヶ月間の社会実験を実施しました。

空間のあり方を検証するため、11月3日〜30日まで1ヶ月間の社会実験を実施しました。

今年度はワークショップで考えたアイデアを小さく実施し、見える化することで、将来像や空間のあり方を検証するため、11月3日〜30日まで1ヶ月間の社会実験を実施しました。

茨木市の中心市街地は、JRと阪急の駅間の約1.3キロメートルあり、その駅間を結ぶ中央通りと東西通りを「歩きやすい、歩きたくなる」メインストリートの形成を目指しています。昨年度は3回のワークショップと2回のミーティング(勉強会)を通して、メインストリートの未来の姿(将来像)を考えました。

茨木市では、市の中心部をより多くの人が訪れ、滞在し、活動したくなるような「まちなか」にするための取組が進められています。



協力いただいた店舗を紹介するガイドマップも作成しました

ターの設置など、スポット的な「点」の視点、②バナー掲出や店舗軒先でのプランター設けによる連続した景観を作る「線」の視点、③案内看板などによりエリア全体の回遊性を生む「面」の視点、④歩行者と自転車交通の適正化を図る「安心・安全」の視点。実施を通して、交通の適正化や歩道空間の活用に関する多くの課題が見えてきました。一方で、今回の取組を通して多くの沿道店舗と連携することができました。約80軒もの店舗にご協力いただき、軒先を活用してプランターやベンチの設置、フラッグの掲出等を実施しました。今回の結果を踏まえ、今後沿道の店舗とも連携しながら、次のアクションを検討していきます。

京都

「京都のまちにお祭りと活気が戻ってきています」
 京都事務所 高瀬咲

3年ぶりに巡行や行列が復活とのことで、7月は祇園祭の山鉾巡行を事務所で見学、10月は、個人的に時代祭の歴史風俗行列を見に行きました

祇園祭では、絢爛な山鉾とおはやし、辻まわしに圧倒され、時代祭では各時代の文化を反映した装いや小道具、個性ある牛や馬など、多くの観点から2,000人の行列を楽しみました。200年の歴史を持つ時代祭でも比較的新しいとされてしまう京都の文化の重厚さに圧倒されつつ、詳しい方の解説やホームページ等で、積み上げてきた歴史について情報を得ながら見学するのが楽しかったです。

関東出身で昨年京都に越してきたため京都のお祭などに疎く、今年度からたくさんの行事を通じて、京都の歴史や文化を満喫しようと意気込んでいます。事務所の先輩方に「京都手帳」なるものの存在を教えてください、購入しようか真剣に悩んでいる今日この頃です(笑)
 旅行割などもはじまり、少しずつ活気が戻る京都のまちに皆さんもぜひ遊びに来てください。



東京



「訪問者とはなにか」

東京事務所 宮英理子

先日、銀座エルメスフォーラムで開催されている『「訪問者」クリスチャン・ヒダカ&タケシ・ムラタ展』に行ってきました。

クリスチャン・ヒダカは、日本と西洋をルーツに持ち、絵画の中でも「Eurasian」として、西洋の遠近法と、東洋の斜投影図法の融合を試みています。空間軸や時間軸がフラットになった世界観は、メタバースを連想させます。

ヒダカ氏は、「分断」を絵画の中で一つにしたいとしています。その一見フラットに融合された世界には、オリエンタリズム的な、支配、被支配の関係が隠れていないか、ということヒダカ氏のルーツとともに考えながら鑑賞しつつ、さらに、絵画と展示空間は入れ子状態になっており、訪問者と被訪問者の視点を行き来するような、複雑な絵画体験となりました。



適塾路地奥サロン報告

適塾路地奥サロン実行委員会

49回
 2022年
 9月28日
 「with コロナ・after コロナの観光まちづくり
 ～まちに恋する「関係観光」～」
 講師 (株)インプリージョン 森なおみ氏

第49回適塾路地奥サロンでは、森なおみ氏をお招きし、「with コロナ・after コロナの観光まちづくり～まちに恋する「関係観光」～」という題目でお話をいただきました。

講演前半では、「大阪ワイン」の地域ブランディングや、星野リゾート「界シリーズ」の地域コンセプトプランニングの事例等、様々な事例についてご紹介いただきました。

後半では、with コロナの観光には、地域の人や来訪者に焦点を当て、人と人がつながる「関係観光」が重要であるという、観光における新しい視点についてご説明いただきました。

特に、いきなり地域の「ファン」をつくらうとするのではなく、「地域への興味(認知)」→「地域訪問(恋)」→「ファン(愛)」といったように、段階的に観光のター

ゲティングを考え、恋心を持ってもらえるようなまちになる努力が必要であるというお話には参加者から共感の声が寄せられ、「恋」という皆さんが理解しやすい(笑)キーワードをもとに充実した議論が展開されました。私自身も恋心を意識し、トキメキを大切にしながら地域へ関わっていきたいと思います。(竹中健起)





近況 & イベントのお知らせ

寺田町プレイス 1 が「2022 年度グッドデザイン賞」を受賞

担当：中塚、畑中、山崎、中川、豊福、塗師木

アルパックが企画・設計・監理した寺田町プレイス 1 が、このたび 2022 年度グッドデザイン賞(主催：公益財団法人日本デザイン振興会)を受賞しました。寺田町プレイス 1 は大阪市内の地元オーナーによる賃貸住宅プロジェクトです。15 分生活圏の小さなcommonsを再生し、人と街を繋ぐスペースをプレイスに変えていくことを目指し、所内外の様々な専門家とコラボレーションしながら進めました。

建築としては明るく風通しの良い住環境等を備え、まちとオーナー双方にとって持続可能で良質な賃貸住

宅ストックとなるように計画しており、まちのcommons再生に向け、小さなcommonsスペースを建物周囲に配置しています。現在はオーナーにより、定期的にマルシェを開催する等の取組みも展開されています。

また、大阪府内の製材所、林業者と協力し、風倒木等の府内産木材の活用やそれらの更新を見据えた仕掛け等、山とまちと人が繋がり続ける仕組を模索しています。

今回の受賞を励みに、これからも「持続可能な地域づくりへの貢献」を実現していくために、所内外の専門家と協力し、様々なプロジェクトに取り組んでいきます。



撮影：笹の倉舎 / 笹倉洋平

■グッドデザイン賞審査委員による評価コメント

高層マンションが建ち並ぶ、駅から徒歩圏内にある敷地に、歩道レベルにはウッドデッキ、バルコニーの軒天には木を仕上げとして使用し、まちにアクティビティや彩りを与えている人に優しい計画である。入口のエレベーターホールに余裕を持たせ、その一部を吹き抜けとして最上部まで設けているので、全体のボリュームが2つに分かれ、全住戸が角部屋となり、採光・通風の優れたプランとなっている。シーンに応じて選択できる間仕切りや住人が簡単に付け替え可能なダクトレール、大阪産材や風倒木、製材端材の積極的な採用など、都市スケールの視点からヒューマンスケールの視点まで、丁寧な計画をしていることは集合住宅の考え方として大変重要な姿勢である。これからの展開も期待されるところである。

アルパック ANNUAL REPORT 2022 をリリースしました！

「樗(たすき)を繋ぐ」と題された冒頭の挨拶にあるように、アルパックでは個々の「自立」を目指しながらも、相互に支え、助け合う「チーム」で仕事を進めています。その時に必要になるのが個々の「自律」。人任せでなく、自ら考え、判断し、行動することは、チームで仕事をするうえでは欠かせません。

アニュアルレポートでは、アルパックが当年度に関わった多様な業務や活動、メンバーなどをまとめて掲載しています。1年間のアルパックをみなさんにお知らせするとともに、専門家としての課題認識や提案を

社会に投げかける役割も持たせています。

今回掲載しているトピックスは「脱炭素化実装—中小企業支援・スマート・再エネ戦略—」「地域でのMaaSの導入・推進」「まちのcommonsの創出」です。それぞれの仕事では、昨今の社会課題に向き合いながら、いろんな価値観を持つ個々がチームとなり、それぞれの役割を担い、取り組んでいます。

当社ホームページからダウンロードできますのでぜひご覧ください。

<https://www.arpak.co.jp/lettersindex>

木下博貴

全社研修会実行委員

ま
ち
か
ど

大阪のDEEPな魅力を発見!

全社研修会を開催しました

コロナ禍において、オンラインという新たなスタイルに触れ合い、業務での活用を視野に昨年、一昨年とオンラインでの開催を行ってきました。

一方、移動自粛や在宅ワークの推進に伴い、社内でのリアルなコミュニケーションの機会がコロナ前に比べると減っているという状況を踏まえ、3年ぶりに対面での全社研修会となりました。

今年、リアルな場において、世代・グループを超えて気軽に触れ合えるテーマとして全社での「まちあ

るき」に挑戦しました。グループ分けをして、大阪のDEEPを探る。グループ毎に決めたテーマをもとに散策し、大阪のDEEPな魅力をみんなで見つけるまちあるきです。

まちあるきの前には、大阪をホームタウンとして編集業、冊子の制作、HPの企画・運営などさまざまなことに取り組みながら大阪の魅力を発見・紹介しつづける『IN/SECTS』の松村貴樹さんをお招きし、『町の見

方・見せ方・歩き方』と題してご講演をいただきました。この中で、大阪という物理的ローカルティとともに、物理的な距離は遠くとも、すぐに打ち解けられたり共感性が高いという個人や団体との問題認識や工夫の共有など精神的距離のローカルティがあり、こうした二つのローカルティの視点からまちを歩き、『ま

MVP (most valuable poster)



「自分しか知らないことよりも、自分しか知らない楽しみ方を見つけみる(知られていないもの(マイナーなもの)を探すのではない)」といったアドバイスをいただきました。

当日は天候も良く、まちあるきを

通して世代を超えたコミュニケーションが図れる良い機会となりました。まちあるきは、8チームに分かれて行い、まちあるきの後には、それぞれの視点で切り取ったDEEP大阪の魅力とまちを紹介する1枚のポスターとして紹介するというグループワークを行いました。短時間ではありましたが、8チームの個性がにじみ出たポスターが制作され、お披露目の際には工夫を凝らしたプレゼンが行われ、最後には投票によるMVP (most valuable poster) が選定されました。

全社研修会は、ご講演を拝聴し、まちあるきを行い、ポスターを制作するという大忙しのスケジュールとなりましたが、久々の全社での交流の場となり、新たな出会いや発見が凝縮された1日となったと思います。みなさまお疲れ様でした。最後に、ご講演からまちあるき、ポスター審査まで1日中お付き合いをいただきました松村貴樹さん、ありがとうございました。



インセクツ賞

表紙写真：常滑のやきもの散歩道 / (撮影 筈谷由紀子)

「レターズアルパック」は、ホームページからご覧いただけます。



アルパック (株) 地域計画建築研究所

Architects, Regional Planners & Associates, Kyoto
<https://www.arpak.co.jp> E-mail: info@arpak.co.jp

本社・京都事務所

〒600-8007 京都市下京区四条通高倉西入立売西町82 TEL(075)221-5132 FAX(075)256-1764

大阪事務所

〒541-0042 大阪市中央区今橋3-1-7 日本生命今橋ビル10F TEL(06)6205-3600 FAX(06)6205-3601

名古屋事務所

〒450-0001 名古屋市中村区那古野1-47-1 名古屋国際センタービル7F TEL(052)462-1030 FAX(052)462-1061

東京事務所

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-15-7 いちご大手町ノースビル4F TEL(03)5244-5132 FAX(03)6273-7715

九州事務所

〒810-0802 (株) よかネット：福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パルビル8F TEL(092)283-2121 FAX(092)283-2128

滋賀営業所

〒527-0012 東近江市八日市本町9-14 TEL(0748)36-2065 FAX(0748)36-2168

ホーチミン (ベトナム) No.187/7, Dien Bien Phu Street, Da Kao Ward, District 1, Ho Chi Minh City, Vietnam



この用紙は「びわ湖の森を元気にする」 kikitoペーパーを使用しています。